

巻頭言

KY(空気・読めない)? …通訳がいればOK!



附属学校教育局長
石隈利紀

TOSHINORI
ISHIKUMA

昨年の流行語に、KY(空気・読めない)がある。KYはよくないこと、恥ずかしいことらしい。KYが流行することに、私は危惧を感じる。場の空気を読むとは、雰囲気を理解することである。構成員の行動、顔の表情など非言語的なサイン、できごとや話のながれなどがヒントになる。そして、その場の空気に応じた行動が求められる。確かに、場の空気を読むことは集団で生きていく力の一つであろう。しかし、空気が読めない者を「KY」として排除する傾向が社会にあることはとても怖いことである。

場の空気が読めない人を排除しないために、できることがある。それは、場の空気が読める者が通訳をすることである。多様な文化のなかで、場の空気がわからないことは、だれにでもしばしばおこる。そのときは、「通訳」が説明すればよいのである。そのヒントを、私は筑波大学附属視覚特別支援学校の授業に見た。紹介したい。

体育の授業の一コマである。マットが2列。一列に4人の(全盲または弱視の)生徒。生徒たちは、前転、後転を習っていた。途中で先生が、「前転すると目が回るよね」と言うと、一人の生徒が目を回した振りをして、倒れて見せた。他の生徒はよく見えないので、何が起こったかよく分からない。すると先生が、「Aくんはわざと倒れて見せたんだね」と、笑って応える。それを聞いて、クラスの生徒たちがどっと笑った。……

先生は、視覚障害のある生徒の学級で、一人ひとりの生徒とやりとりしながら、それをクラスの生徒全員に「実況中継と解説」をしているのである。私たちは、学校や職場で、周りの笑いについていけないときがある。場の空気が読めなくて、グループでつらい思いをする者がいる。そんなとき通訳や実況中継をする人がいたら、場の空気が分かり、排除されることがなくなる。私たちは多文化で生きている。だれかが「場の通訳」になると、生きやすくなる。KYが怖くなる社会をめざしたい。

目次

■巻頭言

KY(空気・読めない)? …通訳がいればOK!

●石隈利紀

■附属学校における国際教育の取り組み

タイでの「視覚障害学生のための理科・数学教材作成」●浜田志津子……………1

シンガポール・ホアチョン中学への短期交換留学生を引率して●肥沼則明……………1

■ご挨拶-1

顔の見える関係をめざして●小林 汎……………2

おハツの心で●坪田耕三……………2

■附属の今

附属の今(附属桐が丘特別支援学校)●吉沢祥子……………2

■研究発表会・研修会

平成19年度附属学校研究発表会●田中輝美……………3

平成19年度附属学校教育局春期研修会の概要●西川公司……………3

■ご挨拶-2

初心にかえて…●塚田泰彦……………4

まっすぐな視線で●藤堂良明……………4

附属高校に着任して●新井邦二郎……………4

37年ぶりの「里帰り」●星野貴行……………4

気持ち新たに●引田秋生……………4

教育の質の向上をめざして●廣瀬雅哉……………5

日々精進●石川満佐育……………5

■温故知新

駒場農学校とネットオークションと●市川道和……………5

■TOPICS

平成20年度附属学校研究協議会等開催日程……………6

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



附属学校における国際教育の取り組み

筑波大学では、「大学の知」を活かした国際教育協力を推進していますが、附属学校教育局においても、各附属学校の教員の専門性を活かした国際教育協力への取り組みが積極的に行われています。そこで、本号では、附属中学校と附属視覚特別支援学校の取り組みを取り上げ、その活動の一端を紹介します。

タイでの「視覚障害学生のための理科・数学教材作成」

附属視覚特別支援学校 浜田志津子

3月31日(月)～4月5日(土)まで、バンコクのファースト・ホテルでタイ国家電子コンピュータ技術センター(NECTEC)、タイ科学技術開発庁(NSTDA)、科学技術省、特殊教育行政局、教育省、タイ国科学技術教育推進研究所(IPST)、タイ盲人協会(TAB)共催の「視覚障害学生のための理科・数学教材作成」と題したワークショップが開かれ、タイの中学校及び高校で視覚に障害のある生徒を指導している先生方101名と、盲学校の先生方(タイでは盲学校は小学校までしかない)32名の計133名が参加しました。



参加者の様子

このワークショップは、視覚障害教育における算数・数学及び理科の指導法の研修と教材作成を目的とし、その講師として、筑波大学特任教授の鳥山由子先生と本校数学科の高村明良教諭、及び理科(化学担当)の浜田志津子が招聘されました。内容は、鳥山先生が視覚障害教育の専門性に基づく指導法とその実験実習について、高村教諭が触察に配慮した図形とグラフ指導及び点字による数式理解の重要性について、浜田が身近な素材を使って生徒自身が自分でできる安全な実験方法について、それぞれ工夫を凝らしたものでした。

また、その際に、タマサート大学をはじめとするタイ国内の様々な分野の教授の方々10名以上の参加があり、その先生方から、「視覚障害生徒に対する実験などの配慮は、視覚に障害のない生徒にも同様に重要な内容で、すぐにでも取り入れられる有効な方法です」との感想が述べられたことが印象的でした。

このワークショップは一昨年に続き、2度目になります。一

昨年は30名ほどの参加者でしたが、今回は参加者は一挙に4倍にもふくれあがり、関心と期待の高まりを実感できました。会場に満ちていたのは、参加者の方々の、障害のある生徒の成長を楽しみにして様々な工夫を続けていきたいという熱い思いでした。そのためにも、日本の教育方法や工夫の紹介を、心待ちにしてくださっていた様子でした。

シンガポール・ホアチョン中学への短期交換留学生を引率して

附属中学校 肥沼則明

筑波大学附属中学校第30回卒業生を送り出した直後の3月24日(月)～4月1日(火)の間、卒業生5名を伴って、シンガポールにあるホアチョン(華僑)中学(Hwa Chong Institute)へ行ってきました。この企画は、昨年11月に同校の男子生徒3名の短期留学生を受け入れたことに対する返礼行事として実現したもので、一昨年より同校と交流のあった本学附属高校との合同企画でもありました。

ホアチョン中学は、その名のとおりシンガポールの中国系住民の子弟に対してエリート教育を行っている学校で、High School(日本の中1～高1に相当)で男子約2,000人、Junior College(同高2～高3)で男女約2,000人の計4,000人が学ぶマンモス校です。敷地は広大で、施設も大変充実した素晴らしい学校です。生徒もとても優秀で、レベルの高い授業内容に対して活発に意見を交わしながら勉強していました。本校から行った生徒は、同校生徒の家庭にホームステイをしながら一緒に授業に参加し、放課後は各種活動に参加しながら同校生徒との交流を深めました。

本校としては初めての取り組みでしたが、異国での生活を直に経験することによって生徒の国際理解教育に役立つ意義ある企画であったと思います。また、私自身も授業を参加させていただいたことはもちろんのこと、同校生徒に対して日本文化の紹介をする授業をするなどして両国の親善に寄与できたと思っています。



筆者(中央)の授業を受けたホアチョン中学の生徒たち